

樺太

樺太での二十年の労苦

北海道 山田 吉太郎

私は昭和四年駒ヶ岳噴火により、樺太に移住し樺太庁土木課に勤務し調査等のため、樺太の大半を廻り終戦引揚げとなった。

もう八十一歳引揚げの労苦を募集するということを引揚者北海道連合会報で知り、樺太二十年の中の一片を投稿します。

一 酷寒零下四十度国境のトンネル工事

樺太庁土木課に勤務していた頃、国境警備道路新設のため測量及道路工事にソ連国境方面に出張していた

時のこと、この年は樺太はかつてない寒さであった。

国境の半田沢の軍用道路から西へ向って、道路測量とトンネル工事である。急を要するため直営工事であった。

仲技手を主任として、私は常用人夫一人、作業員は青森から募集した労務者二十人で十二月頃完成したが、トンネル工事は冬越しとなり坑夫、仙夫の募集、食糧の準備、搬入、工事の指示監督その他で多忙を極め、加えて厳寒となり飯場で薪ストーブを焚いても背中がゾクゾク、朝布団の衿が息が凍って真白くなり、立木は凍結してパンパンと裂ける音が鉄砲のようだ。完全防寒具のない私達は、現場に向う途中、山から吹き下す寒風で立往生することもあった。

トンネル掘削は今の様なブルドーザー等の機械類も

ない時代で手掘りであったが、中に入ると割合に暖かい、私は主任の仲技手が用務で出かけることが多いため、現場の指示や毎日の食料の購入で百キロもある敷香町まで吹雪の中を出かける等大変であった。

然し春の雪解け頃までには事故もなく、トンネルも完成することができた。

今思えば良くあの寒さの中頑張ったものだと思うし、又是非やらねばならなかった工事でもあった。

二 国境に命がけの揭示板建て

敷香町警察署特高の依頼により、国境に揭示板を建てるため、私が仲技手と共に案内役として同行した時のことである。

昭和十八年大東亜戦争の戦況も不利になってきて、日ソ関係も憂慮される情勢にあり、国境線の境界石の外に揭示板を設けて注意を喚起するためのもののである。

うっかり越境でもして、ソ連警備兵に撃たれるかも知れない。特高警察三人、人夫二人、私達と七人、半田沢からフレップの生い茂っている、ツンドラ地帯を

歩いて国境に向った。国境近くにはオロッコ、ギリヤーク、ツングス族の樺太土人が住んでいて、ソ連領と日本領を往復するため、その防止や他の事情もあると思うが、私は何んの役にも立たない、と思いつながらの案内であった。

「国境を通過する者は樺太庁長官の許可を得るべし、無断通過した者は三千円以下の罰金に処す」と云う文句であったと記憶している。

私はそろ／＼国境近くと感じながら先頭に立って進んだ。ところが突然ソ連の軍用犬の吠える声が出た。私達は驚きながらも国境かと後退しながら、一枚建て、次の方向に廻ることにしたが、暗くなってきたので、ツンドラの上で野宿し翌日次の場所へ向って、国境線を探した。

ツンドラ地帯、トド松、エゾ松が密生していて国境の境界石が見つかからない。探している内に何か音楽の音が聞こえてくる。

流送のかけ声のような、然しよく聞くとラジオの音である。丸太小屋も見える。ソ連兵の小屋である。驚

いてもうソ連の国境を越えたのかと思ひながら、後方に知らせたところ木陰から写真を撮りながら、急いで後退した私は一番後になっていつ撃たれるかと真剣になり、軍用犬に吠えられたり、兵舎に近づいたり命がけであつた。

三 人間の寿命を思う

人間一生の間に色々なことに逢ひ、又体験する。平凡に生きる者、波乱万丈に人生を送る者、病氣、事故、災難等で若くして世を去る者、生死を乗り越えて長生きをする者。

これが運命なのか、不思議な感じがする。私も今八十一歳、色々な障害にぶつかつて生きてゐる。幼い時川に溺れかけたり、八歳にして左眼を失ひ、十九歳にしてかつてない駒ヶ岳の大爆発に遭ひ、父兄と共に樺太に移住し、二十歳の時樺太始まつて以来の海難に遭遇、何千人と犠牲者が出た中で、五分か十分の差で奇しくも助かり、北名寄村奥でソ連進駐の時の危険を脱したり、又召集令状が来て、防衛の銃殺を免れたり、樺太庁土木部勤務の時命がけの崖下り、胸までつかる雪解

けの濁流を渡つたり、三メートルもの積雪を夜中さまよい歩いたり、トンネル工事では奥岩門附近で朝鮮人や軋々と働き歩く荒くれ土工夫（ジャコと云う）何百人もの現場で、手抜き工事防止のため口論し一人で心細いこともあつた。

あの山の中で谷底へでも埋められたら終りであつた。

又ソ連兵に自動小銃を突きつけられてもうだめかと思つた。

色々な危険を乗り越えてまだ生き長らえている。人間は死ぬも生きるも、紙一重不思議に思う人生であつた。

樺太を去り四十六年余、国境の軍用道路、トンネル等はどうなつてゐるだろうか！